

「不適切にもほどがある」

10 数年ぶりにテレビドラマにハマっている高野です。「不適切にもほどがある」という令和と昭和を行き来するタイムスリップ・コメディです。

「この主人公は 1986 年から時空を超えてきたため、現在では不適切な発言を繰り返します。言語表現の時代による変遷を描くというこのドラマの特性をご理解の上、ご鑑賞下さい」なんて、テロップにも笑えるような笑えないような…。

今、50 代の私でさえ、「そうだった、そうだった」と思い出す昭和もあります。例えば路線バスの中での喫煙シーン。確かに私が子どもの頃は、路線バスにも吸い殻入れがあり、親父も吸ってたな～なんて思い出します。嫌煙家にとっては、さぞ大変な時代だったことでしょう。

一方、「ハラスメント」や「コンプライアンス」なんて言葉は昭和には無く、ずいぶん窮屈な世の中になったもんだと感じます。

令和の世、パワハラを気にするあまり、「頑張れ」という言葉さえためらう風潮に昭和10年生まれ53歳の主人公、市郎はこう言います。

「期待して、期待に応えてさ、叱られて、励まされて、頑張って…そうやってかかわり合って強くなるのが人間じゃねえの？頑張れって言われてくじけちゃうようじゃ、どっちみち続かねえよ」

この言葉に共感する私も「昭和の男」なのでしょう。

こんなふうに、このドラマは時代とともに私達が得たもの失ったものについて考えさせてくれます。

ただ、笑いの中にも毎回ウルっとくるものもあります。恋愛感情だったり、親子・夫婦関係だったり、人が人を思う気持ちは時が変われど不変ですね。例えば市郎が令和のテレビ出演することになった6話でのこと。令和 Z 世代 vs 昭和おやじ世代のバラエティー番組での市郎の回答に現場は盛り上がります。すると昭和から来たスケバンの純子は自分の親が笑われているのを見て、

「なんだよ今の、人の親父を小バカにして、若い子ばっかひいきしやがって。謝んなよ、失礼じゃん。

要するにさらし物じゃん！うちの親父を子バカにしていいのはな、娘の私だけなんだよ！

どうせやるなら面白くやれよ、笑えねえ全然面白くねえ。」

と吐き捨てます。

娘が父親を思う気持ちにグツときつつ、みんなで一人を袋叩きする文化を切り捨てます。

また、その後続く「38 年たってもこんなものかよ」という言葉にはハッとさせられました。

こんな時代を作ってきた私達の責任が問われている気がしたからです。

未来を作るのは「今」の自分なんだということを教えてくれるこのドラマもまもなく最終回。

最後まで楽しみです。